カッサンドラの予言

Kagoshima はちょっと不思議な街。歴史を誇るわりには県内に残された国宝は1つしかなくて。そんな古き文物に固執しない港町気質は、海外密貿易で「最先端」を欲した DNA なのかも、と肯定もしてみたり。それでいながら現代美術館をもたない県都、そこはやはり保守のご城下。と、こんな綾なす矛盾の真っ只中に（怖いもの知らずに！）誕生したのが KCIC でした。私は同じご町内でギャラリーを営んでいます。アート活動をしては壁に阻まれる鹿児島の窮状を BUNKAHIDERI（文化早り）と3年前、KCIC オープニングで吐露したものでした。さて、HIDERI はその後どうなったでしょう？（客観的に俯瞰してみましょう）。なんとこの街に世界遺産が誕生しています！それにともなって街を歩く外国人観光客の姿も増えました。国民文化祭も鹿児島で開催され、薩摩の伝統芸能から現代アートまで県内のアーティストたちが発信役を担いました。はい、もちろんこれらは KCIC の手柄ではありません（笑）。でもこう考えるべきではないでしょうかーー「Kagoshima に文化の薫り」のあることは努力目標なんかではなくすでにもう必須の条件ーー。質実剛健の鹿児島の風土にあって文化やアートというおカネに換算しがたいものの伝道に邁進した KCIC 立上げメンバーに、だからこそ私は大きな拍手を贈りたいのです。ギリシャ神話のカッサンドラをご存知でしょうか。予知能力を授けられながら同時に「その予言は誰も信じない」という苦しみのジレンマを課されたトロイアの王女。ある意味、アーティストはカッサンドラ。ごく普通に未来が見通せるのに、でも証拠のない予見は社会から受容されるのは稀。KCIC がこれまで折々に重ねてきたイベントは、実は未来への予言だった…そのことを私は知っています。未来の Kagoshima への処方箋、それが KCIC。この美しいミッションの継承、こゝろから期待しています。

永井 明弘（ながい あきひろ） レトロフトチトセ代表／造園家

1959 年鹿児島市生まれ。鹿児島市名山町にある築50年の古ビル内空きテナントに 2009 年ギャラリー「レトロフト Museo」を開設。
2012 年同ビル1階に「レトロフトチトセ」を開設。古書店やカフェ、アトリエの混在するビルの中から
若手アーティストをまきこんだ鹿児島の魅力発信の手法をさまざまに模索中。

Workshop

こどもワークショップ 2016 アーティストとやってみる！はじめてアート

2016 年 8 月 27 日（土）～
2017 年 2 月 18 日（土）全 6 回プログラム
会 場 ：かごしま文化情報センター
講 師 ：木浦 奈津子・田原迫 華・根本 修平
下園 詠子・久保 雄太

わたしたちの地域辞典をつくるワークショップ 伊敷ニュータウン編

2017 年 2 月 4 日（土）
会 場 ：A コープ鹿児島
いしき店 2F 大会議室

わたしたちの地域辞典をつくるワークショップ 桜島・古里編

2017 年 2 月 5 日（日）
会 場 ：改新交流センター

Project

KCIC アートマネジメントラボ 2016

2016 年 7 月 23 日（土）
～12 月 13 日（火）全6回
テーマ：「〇〇× アート」
スポーツ・観光・企業・建築・防災・政策
ゲスト：宇野 常寛・山出 淳也・加藤 種男
辻 琢磨・会田 大也・永田 宏和・大澤 寅雄

背中合わせの風景を交換するワークショップ

2016 年 7 月 9 日（土）
会 場 ：市民アートギャラリー、
天文館

仮面づくりワークショップ

2016 年 10 月 28 日（金）
会 場 ：天文館公園「かごしま仮面祭」ブース内
講 師 ：仮面夫婦プロジェクト

2016 ふるさとコンサート in 皆与志町

2016 年 12 月 3 日（土）
会 場 ：鹿児島市立皆与志小学校

Annual Report

かごしま文化情報センター（KCIC）は、毎年3月にアニュアルレポートを発行してきました。これは、年間の活動を振り返り、記録、広報するための活動です。市民とアーティストの協働による“創作活動”、学びの場としての“セミナー”や体験を共有する“ワークショップ”の各事業、そして“情報発信”について年度ごとに網羅しています。

Arts Crossing Annual Report 2013

Arts Crossing Annual Report 2014

Arts Crossing Annual Report 2015

（活動実績：2013年8月～2017年3月 企画数 67、参加者数 22,293人）

Collaboration

つい de サロン「2つの視点から生まれる建築」

2016 年 7 月 9 日（土）
会 場 ：市民アートギャラリー
ゲスト ：宇都 博徳、米永 優子

建築展「2つの窓辺から生まれる暮らし」

2016 年 7 月 4 日（月）
～7 月 23 日（土）
協 力 ：鹿児島大学建築学科
第一工業大学建築デザイン学科

オープンハウス カゴシマ 2016

2016 年 12 月 3 日（土）
～12 月 4 日（日）
会 場 ：鹿児島市内 45 箇所

＜シンポジウム＞ まちなかの近現代建築 ～存在意義と保全・活用にむけて～

2016 年 12 月 3 日（土）
会 場 ：市民アートギャラリー
ゲスト ：松岡 恭子、鯵坂 徹

photo：リアライズ

Outreach

かごしま伝統芸能ネットワーク会議

2016 年 5 月 28 日（土）
会 場 ：アクアガーデンホテル福丸

伝統芸能伝承サマーキャンプ

2016 年 7 月 30 日（土）
31 日（日）1 泊 2 日
会 場 ：鹿児島県青少年研修センター
及び鹿児島市維新ふるさと館

2013年より発行してまいりましたKCIC Arts Crossing は、今号を最後に休刊させていただきます。鹿児島市文化薫る地域の魅力づくりプランが、第2期に移行するにあたり事業方針及び事業計画が変更となるため、同プランの拠点であるかごしま文化情報センター（KCIC）における取組みも変わることになりました。新たな事業計画の中で、新しい形で、またみなさまにお会いできることを楽しみにしています。
これまで、ご愛読いただきましてありがとうございました。

かごしま文化情報センター （ Arts Crossing 08 ）

企画制作・編集：かごしま文化情報センター（KCIC）アートディビジョン
アートディレクション＆デザイン：久保 雄太
発行：文化薫る地域の魅力づくり実行委員会、鹿児島市
892-0815 鹿児島県鹿児島市基居町 1-2 鹿児島市役所 みなと大通り別館 1F
かごしま文化情報センター（KCIC）内
tel. 099-248-8121 information@kcic.jp http://www.kcic.jp
2017 年 3 月 15 日発行

© 文化薫る地域の魅力づくり実行委員会 本誌記事・写真・イラスト等の無断転載を禁じます。

地域のことを考える
そんなときに読みたい書籍（紙／電子）を
1 冊ずつご紹介します。

KCIC book mark

紙

都市をたたむ

人口減少時代をデザインする都市計画
著者：饗庭 伸 発行：花伝社

かつて、「生き延びるための手段」であったはずの都市。人口減少時代に差し掛かった今、都市は「都市を維持することが目的になっているのではないか？」。そんな著者の問題提起に強く共感できる人は少なくないのではないか。自動車やインターネットの普及、市場原理の拡大など、絶えず激しく変化していく時代に、人口減少の波によって都市は否応なく縮小していく。そのなかで都市をどうやってたたんでいくべきか。著者が関わった事例とともにその可能性が語られている。本書は、世界初の現象である「高度に都市化した国での人口減少」に直面している日本において、私たちを豊かにするために、あらためて都市を手段として捉え、都市を機能させるための「都市計画」を考える一冊。(1)

電

わたしのマチオモイ帖書店

発行：わたしのマチオモイ帖制作委員会
https://bccks.jp/store/machiomoi

「町を思うこと」は誰にでもできる。「町」を想う「帳面」＝「マチオモイ帖」。マチオモイ帖は、ガイドブックにも載っていない町や知らなかった町が、クリエイターたちの視点で紹介される冊子。ひとりの女性クリエイターが、自身の故郷を伝える小さな冊子をつくったことではじまった活動は、2011 年「クリエイターが社会に対してできること」をテーマにした展覧会で 34 組のクリエイターが参加するかたちで発表され、今や日本全国で展開されている。自分の町も、もう一度見直してみたくなる「帳面」は、あたたかい共感に満ちたものとなっている。これまでにつくられた歩くのマチオモイ帖の中の一部（30 冊）を無料で読むことができる。(1)

ローカルから発信する
文化を通した街づくりを
ご紹介します。

Local + Art

「 Local + Art 」

私が鹿児島に帰った年に8･6水害が起きた。勤め先からの複数ある帰路をすべて断たれ、山の中の道なき道を歩いて深夜にようやく自宅に辿り着いたが、目の前の崖崩れの中に人が埋まってるとか耳にしながら、ここもダメ、向こうもダメと帰路が断たれていく様は今でも怖かった事を思い出す。その後、半年以上、普通の雨音でも怖くて震えたりした。

復興の日々の中でリアルに目にし耳にしていた「五石橋撤去」のこと。
8･6水害まで気にもしていなかったけど、歴史を内包しつつ日常に溶け込んでいたモノの喪失感。それは、この地に住む人たちが等しく感じただろうと今でも思う。やるせない思いを持ちつつも、日は昇り日は沈み、時は過ぎていき、みんなの中で史実として消化されていってしまった。

それから10年の時を経てようやく、私の若く短いなりの波乱万丈の人生も落ち着きを取り戻し、自分の本当にやってみたかった生き方を実現すべく、アートNPOを立ち上げ、活動を本格化させた頃に、改めて、「五石橋撤去」に向き合うこととなった。
藤 浩志さんの絵本「たけのはし」である。
「たけのはし」はもちろん、そこから紐づいて出てくるあらゆる人の表現や思いや話に出会いつつ、少しずつ何かが自分の中に落ちてきて広がり、その後のNPOの活動で出会う人や出来事もいろいろ絡まりながら都度解釈が深まり、頭の中でつかず離れずの長い時間を経て、辿り着いたひとつの思い。「五石橋撤去」の賛否を問わずそれに関わったすべての人が深く深く傷ついたという大きな哀しみに辿り着いた。報道や記録という史実では汲み取ることはできない、表現されたものを自分で受け止め、自分を取り巻く社会や多くの出来事、多くの時間とともに咀嚼して初めて辿り着いたその哀しみは、リアルタイムで自分の哀しみでもあることに、ある日ふと気づいたのはつい最近のことだったりもする。

［写真］2006.11.2 藤 浩志氏とかわなべ森の学校にて

日々起こるさまざまな物事が、24時間という時の中で起きた事として、何もかも同列に流れていきがちだけど、事の重大さや衝撃や溢れんばかりの思いから、物事が止まって見えたり、スローモーションのようにゆっくりと見えたり、押し寄せる波のように繰り返し同じシーンが見えたりしてもいいはず。そして、何が重大で、何が劇的で、何が奮い立たせる衝動になるかはそれぞれの人によって違うはず。
私の水害体験のように、実際の社会での体験を、アーティストの表現で再体験・追体験する事で、日常の中で流れていってしまったままその時に気づかなかった事に気付いたり、とても大切な事がわかったりする。そして、気づいたりわかったりした「それ」は、深く大きく自分の心の中に広がっていくものであるし、必ずしも自分を肯定するものだけでもない。その後の生き方や人生の中で大切にしようとするものが変化してしまうほどの影響力があることもわかっていたい。

伝統の技や素晴らしい作品を才能と努力によって表現し私たちを魅了する文化芸術は、これまでも、これからも、人にとっても社会にとっても不可欠なもので、それ自体に影響を受けて人生が大きく動き出す人たちも多い。そのベクトルとは別に、表現されたものや表現者その人の生き方に出会い、受け止めた側が大きく変化していく事もあって、それは別にアートシーンには限らず、逆にそれ以外の方が多いかもしれない。でも、それはとても芸術的といえるような気がする。そういう人たちは、表現者も、受止め変化した側も、総じて魅力的な気もする。

自分が最も心地よく感じる手法や表現を通して、社会の中で流れていってしまう物事を改めて見つめ咀嚼し直す事が、社会の中で多くの人たちと共に生きていくためにとても大事な気がする。

私がアートNPOを始めて丸13年。現代アート不毛の地と言われていたこの鹿児島も大きく変わった。そう言われた背景には何があったのか？その時代のさまざまなアーティストの表現やその時代を作っていた人たちを紐解いていくとわかるのかもしれない。

文化薫る地域の魅力づくりプラン実行委員
同 美術部会長
KCIC アドミニストレーション
早川 由美子

KCIC PROJECT

2015年度より、ダンサー・振付家の手塚夏子さんをお招きして取り組んだ現代をこの地で生きる私たちにとっての「うた」と「踊り」を立ち上げる試み。昨年度は鹿児島に既にある伝統芸能をリサーチし、今年度は実際に鹿児島に住む市民と共にワークショップを重ね、様々な手法でうたや踊りが人々の間から湧き出るための模索がなされました。
手塚さんと参加者との試行錯誤の末、そこへ居合わせた人が誰でも踊りに参加できる「いつの間にか音頭」という仕組みが生まれました。

わたしたちのうた、わたしたちの踊りをつくるプロジェクト2016

2016年6月〜11月
かごしま文化情報センター、市民アートギャラリー
ワークショップナビゲーター　手塚 夏子（ダンサー / 振付家）

「いつの間にか音頭」 11月3日(木・祝)

ゲストミュージシャン　カエルPROJECT
わたしたちの仮面をつくるワークショップ講師　仮面夫婦プロジェクト
トークイベントゲスト　アサダワタル(日常編集家)

電子書籍：http://bccks.jp/bcck/147581

助成：一般財団法人 前川報恩会 平成28年度 地域振興助成事業(ワークショップ・電子書籍)、公益財団法人 福武財団(イベント)

手塚さんと共にワークショップを重ね、参加者の声や思いを集めていく。

いつの間にか歌ってて いつの間にか踊ってる。

ワークショップ参加者全員で考えた言葉に様々な楽器でリズムをつけた。

天井から吊るされた短冊には、地域に住む人々から集めた「いま吐き出したいこと」「こうであったらいいという思い」などが記してある。その言葉をもとに、その場で歌詞に作り変え、歌った。

踊りの参加者は、歌いたくなったら歌詞を一枚選び、即興で節をつけて歌う。

人が考え方のちがいとかで
一緒にいれなくなったり
話ができなくなったり
そういうことが一番つまらないこと
いろんな違いがあっても
一緒に生きていけるということで
歌ったり踊ったり…
そこには本音をぶつけてもいい
という気持ちにみんながなれて
でも歌だから傷つけ合わずに
楽しんでいけたらいいなと
おもっています

— 手塚 夏子

辻さん、会田さんによるモノセレモニーズの説明会によってワークショップの参加者を募った。

モノセレモニーズ

説明会　：2016年9月22日(木・祝)
ワークショップ　：2016年11月23日(水・祝)–27日(日)
展示　：2016年11月27日(日)–12月20日(火)

セレモニーコーディネーター
辻 琢磨（建築家）、会田 大也（ミュージアムエデュケーター）

市民アーティスト
北野 真衣、穂満 亮祐、飯泉 綾子、入田 裕夏子、大山 佳菜
市村 良平(KCICスタッフ)

技術サポート　サポーター
宮園 孝都　応援団員W、江口 美久、森永 涼平

作品
ハモンドの踊る靴／辻 琢磨・会田 大也（レトロフト）
インサイドメモリー／北野 真衣（ふじゃ丘保育園）
かがみん／入田 裕夏子・大山 佳菜（KENTA STORE）
街の報せ／穂満 亮祐（ホテルニューニシノ）
ライフ・イズ・ビューティフル／飯泉 綾子（凡）
スタンドアップスタンド／市村 良平（かごしま文化情報センター）
※( )内設置場所

モノ提供者
市村 良平、迫田 晶子、田原迫 華、永井 明弘、永井 友美恵、西野 由季子
林光華園、ふじゃ丘保育園、宮園 めぐみ、四元 朝子　※50音順

電子書籍：http://www.tsujitakuma.jp/kcic（3月末公開）

助成：一般財団法人地域創造

食の魅力を発信するKENTA STOREでは旅館に置かれてあった姿見と建築学生が使用していた製図板を使って看板を制作。

KCICでは今回のコンセプトドローイングも展示。（ドローイング：篠崎 理一郎）

集まったモノ・ヒト・場所は新たな関わりを生み、街の風景となる。

建築家とミュージアムエデュケーターが協働で企画したワークショップの参加者による、ささやかな芸術祭。 ひとつのモノがその機能を終えるまでのエピローグではなく、そこから生まれ変わり、新たに風景として溶け込んでいく過程を、現代の「セレモニー」として捉え、地域に住む人々の思いが詰まった「モノ」が、新しい使い手の元に渡り、異なる役割を持って、風景となっていく「もの」がたりです。

ワークショップ参加者が、市民から提供されたモノをもとに設計図を描き、加工する。

ものを寄贈した人は大切にしていたものが供養され
新たな場所で使われていくことを歓び
場所を提供してくれた人は場所を改善できたことを歓び
ワークショップに参加した人は
その双方を結び合わせられたことを
もの自身や、場所自身が主語を持つとしたら
彼らも自身の変化を歓んだ
そして、僕自身も
これまで浜松で活動してきた実践が
このような形で鹿児島で結実したことを心から歓んだ

— 辻 琢磨

古書店とギャラリーを中心に地域の文化を発信するレトロフトでは、近隣の中華料理屋の円卓を使用して、ハモンドオルガンに車輪付きの台座を制作。納品時にオーナーよりアーティストへ「誕生祭」のくす玉のプレゼントが。